

咲庵

中山義秀

講談社版

咲庵せうあん

昭和三十九年十一月二十五日第二刷發行

著者 中山義秀

發行者 野間省一

發行所 株式會社講談社

東京都文京區音羽町三ノ一九

電話 東京(九四二)一一二一(大代表)

振替 東京三九三〇

印刷所 豐國印刷株式會社

製本所 文信社

定價 四九〇圓

唉^{せう}

庵^{あん}

ほととぎすいくたび森の木間かな

咲庵

緑蔭の影が深くなつた。

五月雨にいる初夏の候の晡時前、空ひくくたれこめた雨雲が、廣野一帯をうす墨色にとざしてゐる。

右脇に首をかかへこんだ黒具足の若武者が、左手に薙刀をうちふりうちふり、躍りあがるやうにして彼方から一散にかけてくる。つづいて中年の武者が大太刀をひつさげ、前こごみになつてその後を追うてくる。

若武者は河畔の廣場に陣どつた、大將の幕營の前にちかづくと、驚くやうな大聲をひびかせて、羽栗の住人小牧源太道家が、敵の大將道三入道どうさんの首を討取つたと報告した。

後の武者も彼におとらぬ大聲をあげ、我こそはまつききに入道殿ととり組んだが、後からきた源太に功を先んじられたため、しるしに入道殿の鼻をそいで持参したと申しいた。

幕營の中央、熊皮をしいた胡床に腰をおろしてゐた、大將一色左京太夫范可は、膝頭にたてた軍扇を前へのぼして、無言に「これへ」といふ動作をした。

その合圖で彼の面前の緑の芝生に、實檢にそなへられた首は、くぼんだ眼窩の奥に目をとち、頭は白髪で鼻がかけ、皺たるんだ兩頬はどつぷりと血にそまつて、ふた目と正視できないやうな無殘な相貌である。

これがさきの美濃國太守、齋藤山城守秀龍入道道三どうさんのかはりはてた姿だ。梟雄とよばれ主殺しの人非人と罵られた人にあるまじく、みじめに哀れげでさへあつた。

幕營の前面左右に膝まづいて、大將の實檢にたちあつた側近將士等は、いづれも聲をのみ息の根をころして道三の首を見まもつてゐる。道三は彼等の舊主であつた。

左京太夫范可もおなじく、しばらくの間黙つて道三の首を睨みつけてゐたが、つと胡床から起ちあがると、

「これも、身からでた錆だと思へ、老いぼれ」

さう引導をわたすなり、毛皮の沓をもつて道三の首をはつしと蹴とばした。首が二轉、三轉する前に、小牧がすかさずそれを受けとめ、

「殿、これを手前に、賜はらせて下さい」

「おお、勝手にするがよい」

范可は六尺にあまる巨體をゆすつて席へもどりしな、沈黙してゐる周圍の將兵の中に、明智光秀の顔をもとめ、

「十兵衛、その方の顔色は、何といたした」

「はっ」

光秀は頭をたれて兩手をつき、

「別段のことは、ござりませぬ」

「ぬかせ、まつ青ぢや。臆病げに見ゆるぞ」

衆人の前で臆病といはれるのは、武人の何より恥辱とするところ、光秀が青ざめた顔をあげて、范可の顔を見上げると、憎惡をこめた眼差しで、彼を睨みつけてゐる范可と瞳が

あつた。

十兵衛光秀は、この時二十九歳、范可は三十歳、わづか一つの違ひではあるが、たがひの氣質にそりの合はないところがあるやうであつた。

范可は獨裁者である。それ故に二人の弟を殺し父を殺し、しかもその首を足蹴にした。光秀にはさういふ圖太さや、無神經さはない。

道三は彼の一族、明智の城主入道宗寂そうしやくの娘婿であつた。そのため宗寂は、この戦に出馬してゐない。かはりに光秀に三十騎ばかりの手兵をさづけ、國守の范可側に参加させた。美濃の守護職にたいする、名目だけの儀禮である。

范可のために馳せさんじた美濃國東西の侍衆は一萬八千、明智領一萬五千貫、石高になほして七萬五千石の城主として、宗寂の派遣した三十騎は少數にすぎる。范可はそれを憎んだのであらうか。それとも父道三の首を足蹴にする范可の不逞な所業に蒼ざめた、光秀の二心を咎めたのであつたらうか。

范可は大きな圖體ににあはず孤獨な生れつきで、かつ癪をやんでゐた。彼は道三の子となつてゐるが、じつは土岐家最後の守護よりのり頼藝の落胤だとされてゐる。

頼藝よりつりから道三にたまはつた愛妾みよしの深芳野は、七ヶ月で范可を生んだ。月足らずで生れたの

か、それとも道三に賜はる前すでに頼藝の胤をはらんでゐたものか、そのところは瞭りしないが、王朝以來主君が家臣に、妊婦を下賜するのはべつに珍しいことではなかつた。

道三は五十五歳で隱退して、二十二歳の范可に國をゆづり稻葉の本城をあけわたして、長良川の對岸鷺山の館にうつり、なほ國內の政務をみてゐた。范可がまだ未熟な青年であつてみれば、これは當然なことであらう。

しかし當時新九郎高政を名のつてゐた范可が、壯年にちかづき癩を發するやうになつてから、事情がむづかしくなつてきた。

道三は宗寂の娘小見の方の腹にうまれた實子に、家督をつがせたいと思ふやうになつたかも知れないし、高政の方ではまた獨裁をねがひ、癩病のため廢立されるのを警戒したかも知らない。

とにかく父子の間が圓滑をかき、やがて相剋するやうになつたのは、高政側近の老臣が高政の出生の祕密をうち明けて、高政こそ土岐頼藝の血をうけた、まことの美濃の守護と、信じこませたからだと思はれる。

高政は重病をよそほひ、道三が狩野にでかけた留守中、道三の二子を見舞によびよせて斬殺した。それから母方の姓を名のつて一色左京太夫とあらため、父殺し范可の名をとつて號とした。

それが昨年の秋の末、父子たがひに國內の兵をあつめ、長良川を中にはさんで對峙すること約半年、兵力三千にたらない道三方はたびたび敗北して、つひに四月二十日、長良河畔で敗死するにいたつた。

道三はその日赤の大黒頭巾に白絹のほろをつけ、乗馬もないまゝかちだちで、本據とする城田寺きたじの城へ引上げてゆく途中であつた。

後を追ひかけた稻葉治左衛門が、道三に組みついてもみあつてゐる間に、小牧源太がかけてきて背後から道三の兩脚を薙ぎはらひ、のめつたところを幌ほろの上から馬乗りになつて、首をかき落した次第である。

道三はその前日、他處にあづけてある十一歳の末子勘九郎に、遺言狀をおくりとどけた。意譯すると、次のやうなものになる。

ことさら申送るやうだが、このたび美濃の國大桑の府城で、自分の後美濃國の處置は、織田上總介信長の存分にまかせる旨、讓狀をわたした。それで信長も明日の戦には、木曾川の下流をおし渡つて、尾張から出張してくるであらう。

ところでお前は、かねてから堅く申しつけておいたやうに、この父がもと修業してをつた京の妙覺寺へのぼつて、僧籍に入るがよい。一子出家すれば、九族天に生るといふではないか。

しかし、このやうに認めてをるうちにも、落つるのは泪ばかり、よしそれも夢、そちが父齋藤山城、法華の妙體をうけ、生老病死の苦をば、修羅道になげうつて佛果をうる。嬉しいぞや、明日一戦におよべば、おそらく首足ところを異にして、成佛をとげることは疑ひない。まことにこそ

捨てだに この世のほかはなきものを

いづくか終の住みかなりけん

弘治二年 四月十九日

齋藤山城入道道三

兒參る

戰國の武將や戰士の多くが、世の無常をかんじてゐたやうに、梟雄とよばれた道三にも、かうした一面がある。彼は唯一人のこされた我が子を、戰の修羅道にさらすのを忍びえなかつた。そのためわざと美濃一國の支配は信長にまかせたから、未練をのこすなといふ意味で、遺言狀の冒頭にことわつておいたのであらう。

「嬉しい哉　すでに明日一戰におよぶ、五臓不具の成佛　疑あるべからず」

とは戰國武將の心意氣といへば心意氣、負け惜しみといへば負け惜しみと云はれないこともない。

六十三年の彼の生涯は、野心をもつて始まり、この世のほかに安住をもため感慨の辭世で終つた。

道三は御所北面の武士、松波左近將監藤原基宗の妾腹の子とつたへられてゐる。末子の勘九郎とおなじ年の十一歳で、日蓮宗の大伽藍妙覺寺に入つて法蓮とよばれ、成人後還俗して山崎八幡宮の油問屋、奈良屋又兵衛の娘婿となり、あらたに問屋山崎屋を經營するや

うになつた。

えごまの種子から燈油をしぼりだして、これまでの松火にかはらせたのは山崎八幡宮である。そのため燈油の獨占販賣權をもち、座をつくつて諸國にひろく賣りさばいてゐた。

奈良屋や山崎屋はこの座にぞくする商人で、山崎屋は美濃國に市場をもち、獨占販賣と高利の金貸しで巨富をなした。折柄美濃の守護土岐家や守護代の長井家は、内訌にあけくれて財力が疲弊し、當時庄五郎といった道三の金融をあふぐやうになる。

道三はさうした關係から家中に入りこんで、つひに土岐や長井にかはり美濃一國をのつとつてしまつたわけだ。金融業者が貸付金の抵當に、會社や工場をのつとるのと同じやうなものだつたかもしれないが、道三にそれだけの器量と實力があつたのはもとよりで、その半面他人のものを横奪したといふそしりはまぬかれまい。

その弱點を范可につかれて、はかない最期をとげたわけであるが、内實はともかく表面はどこまでも父子の争であつたところに、國內の悲劇があつた。道三父子の權力の争奪であつたばかりでなく、家臣の間でも父子兄弟、親戚、朋友、敵味方にわかれて殺戮しあひ、千餘の死者をだしたからである。

感じやすい光秀は、これによつて大きな衝撃をうけた。後年海内一の撃手とうたはれた光秀が、最初に銃砲の手ほどきをうけたのは、道三からであつた。

道三は鐵砲ばかりでなく、弓馬槍劍から遊藝にも通じてゐた。

道三が土岐の家中に入つて國守となるまで、わづか十數年にすぎなかつたかはり、雌伏の時がながかつた。その間に道三は孜々として他日にそなへ、百般の修業につとめたに相違ない。そしてそのすべてを、彼の出世のために役立てた。文學から禪學の素養まで淺くなかつたことは、今に残されてある道三自筆の遺言狀からでも推察されよう。

五體不具のいたましい成佛をとげたにしろ、一生の志をつらぬいた點では、まづ遺憾のない生涯だつたといつてよい。彼が明日の死を覺悟した、いさぎよい最期からしても、なしうる事をなしとげた者の未練のない心境がうかがはれる。この世のほかに終の棲み家を求めるなどとは、彼にかぎらず贅澤な願ひごとだ。

范可は道三をほろぼした後、彼の遺領をとりあげて、名實ともに美濃の國守となり、まとも改名して正式に齋藤美濃守義龍と名のるやうになつた。

そしてこの年の九月、明智城へおしよせ、二日後城を攻めおとして、明智領七萬五千石

はもとより、東美濃一帯を確實に手中のものにした。道三が明智宗寂の娘をめとつたのは、東美濃衆を味方につけるためであり、義龍が城をうばつて宗寂一族をほろぼしたのは、はつきりとわが版圖に加へるためであつた。

土岐の支族明智一家は、二百數十年間土著したこの地に跡をたつことになり、妻子をわけて城をのがれて明智光秀が、わづかにその名跡をになふことになつた。

彼は妻子を京の寺にあづけて武者修業にいでたち、越前の朝倉義景のもとに身をよせるまで六年間、北はみちのく南は九州へとさすらひの旅をつづける。

しかし、その事跡ははつきりとしてゐない。信長や秀吉のやうに、彼の傳記をつたへる忠實な右筆はゐなかつたし、彼自身も何等書きのこすところなかつたやうである。あつても叛臣であることを忌まれて、おほかたは空しく遺棄されてしまつたのかもしれない。

光秀の青年時代で、比較的はつきりしてゐるのは、齋藤父子の争に光秀が子の義龍側について、参加したといふことぐらゐである。

范可の義龍が父の首を足げにするのを見て、光秀が蒼白になつたのは、はたしてどのような感情だつたからであらうか。また産衣うぶぎの頃から育てあげて家督をゆづつた上、二人の

子供を暗殺されわが身まで殺される道三の生涯、さらにその宿命を甘受して末子に僧になれと勧める武將の心情を、いかにくみとつたのであつたか。

もとより光秀は當時、道三の遺言狀を知るはずはなかつたが、たとへ知つてゐたにしても、鼻をそがれた道三のみじめな白髪首をみれば、おそらく彼の殊勝な心情に同感はしなかつたであらう。

光秀は道三の最後の姿に立會ひ、明智落城といふ打撃をうけて、心機一轉した。彼が京の寺に妻子をあづけ、遍歴の旅にのぼつたのも、心中ひそかに期するところあつたからに違ひない。それ故六年の漂泊と刻苦に堪へたのであらうし、又堪へなければならぬほどに不遇でもあつた。

遍歴六年後の永祿五年、明智十兵衛は越前の一乗谷、朝倉の城下にたどりついた。

北はみちのく盛岡、南は九州薩摩、東山、東海、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道、六十餘州をほぼ限なくめぐつて、各地戰國武將の弓箭の強弱をうかがつたとある。